

雜 錄

神 戶 よ り

岸 波 常 藏

今回同窓會の報告機關創設に付何か報告をどの御趣意に承り候も、別して聞上る様な事柄もなく、また卑見を述ぶる野

地にて谷津善次郎兄の御宅に度々参り候木村徳藏氏の御宅も谷津兄の近處に候、先頃街上思ひもかけず吾妻忠吉君に逢ひ

專 門 部 事 務 室 よ り

近き人は目にも觀られ遠きも新しき諸君は既に御承知のと、存じ候へども古く

院長室の西隣、元の標本、機械室は之を二分して一半は事務室、他は圖書館の

候へば、時節柄少々陰氣に候へども、専門部に獨一無二の鑄鐵製ストーブ此處にあり、雲母を通して赫々と燃え立つコ

專 門 部 事 務 室 よ り

あり、別室の書棚を合するも尙不足を告ぐる盛況に有之候。中央にテーブル

圖書館本部に相對し校舎の東北隅なる元の理化室は全部疊を敷きつめ小集會室

つゝ研究に餘念なし。之と逆丁字形をなして二個宛相對せるもの四、北端に南

專 門 部 事 務 室 よ り

階上には神學科の教室三個と講堂とあり、講堂に掲げたる「敬神愛人」の額は

以上勿卒の際一氣に筆を呵して専門部を表面的に描寫致し候。不具の段幾重にも容赦願上候。擲筆に際し同窓生諸君の健康を祈る。勿々。

(二月廿二日市公)